

[巻 頭 言]

企業における情報化の体験

東北大学理事・情報担当
東北大学情報シナジー機構長
杉 山 一 彦

昨年11月から東北大学・情報シナジー機構を担当することになりました。産業界では長年にわたり事業経営に携わりましたが、国立大学の法人化に当り縁あって母校東北大学で仕事をすることになりました。情報シナジー機構と、その全国共同利用の運営を皆様のご理解とご協力を頂きながら進めて参りたいと思います。

さて、私は情報システムの専門家ではありませんが、産業界で体験した「情報化」に関しての思い出話をいくつか披露したいと思います。機械工学科出身の私が松下電器産業に入社して20年ほどは、電気機器生産用の自動機械の開発・製作・実用化の仕事をしておりました。生産設備の開発には多くの計算が不可欠ですが、昭和30年代～40年代は計算方法の大変換の時代でした。筆算、ソロバン、計算尺、手回し計算機、卓上電動計算機、そして小型携帯計算機（液晶表示）など目まぐるしい進展の中で過ごしたものでした。

大型計算機については大学に於る歴史とよく似ていて、大型の情報処理システムの第一歩は本社機構の中に「大型計算センター」を設け、多くの部門がこれを共同利用するという姿でした。

[体験談その1]

若い日々、私が担当していた金型分野で「CAD/CAM」の開発をしました。設備設計・製造の効率化のためのCAD/CAMは昭和40年代としては先進的なものであり、結構いい方式ができました。しかし、これを使い始めて一年ほどすると業界からより良いシステムが提供されました。負けてはならじと新しいシステムを開発すると、また一年するとさらに良いものが出てきました。

このとき思ったことは、社会の情報システムの進化はますます早くなってくるだろう。業界が力を入れる汎用性のあるシステムの使い方と、自らの独自性のためのシステムを効率よく使いわける考え方を持つべきだと痛感しました。

[体験談その2]

多くの人に関心を持った「コンピューター2000年問題への対応」がありました。この時期私は会社の情報総括責任者であり、全世界の部門で問題

